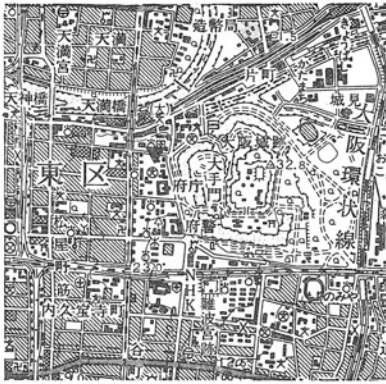


大阪・大坂城跡

- 1 所在地 大阪市中心区大手前二丁目
- 2 調査期間 第一次調査 一九八六年(昭61)九月～一九八七年三月、第二次調査 一九八八年八月～一九八九年二月

- 3 発掘機関 大阪府教育委員会
- 4 調査担当者 佐久間貴士
- 5 遺跡の種類 城郭跡・城下町跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

調査地点では古墳時代以降の各時代の遺構・遺物が発見されているが、今回報告する時代は豊臣期と江戸時代である。

大坂城は天正十一年(一五八三)に豊臣秀吉が築城を開始し、本丸・二の丸及び城下町がつくられた。慶

長三年(一五九八)には二の丸の西と南にあった城下町を取り払い、新たに三の丸を増築した。調査地点は現大坂城二の丸の西にあり、府立大手前高等学校の校舎改築工事にもなって調査を実施した。調査は二次に分けて面積約二七五〇㎡を発掘した。ここは豊臣期大坂城二の丸の西にあたり、天正十一年から慶長三年まで城下町、以後慶長十九年(一六一四)大坂冬の陣でとりこわされるまで大坂城三の丸であった。豊臣期城下町の遺構面は二面あり、城下町の時期を豊臣Ⅰ期とした。整地層から「天正十六年」「文禄四年」銘の木簡が出土し、東西南北に交差する道路と、西側に短冊型に並ぶ屋地が発見された。屋地は南北道に地口を開き、奥行が深い。表側に町屋、奥に井戸や多数のゴミ穴が掘られていた。木簡はこのゴミ穴から多く出土し、上部の整地層(遺物包含層)からも出土した。とりわけ道の交差する角地の屋地の大きなゴミ穴(土壙一四五)から、やや多くの木簡が出土した。この屋地からは「三十両」と刻んだ分銅も出土しており、「二郎左衛門尉」とよばれる商人の家だったようである。三の丸の時期は豊臣Ⅱ期とした。城内に小規模な武家屋敷が二区画発見された。

江戸時代になると豊臣期の大坂城はとりこわされ、徳川の大坂城が築かれた。この地点は堀端の広い空地(火除け地)となり、すぐ北に番所が置かれていた。宝暦八(一〇八)年(一七五八～一七六〇)頃の「大坂大絵図」には馬場が描かれている。その前後の絵図では元禄

年間（一七〇頃）には描かれておらず、明和二年（一七六五）「増補大坂図」、天明九年（一七八九）「摂州大坂地図」にも描かれていない。よって馬場は一七〇〇年代前半から一七六五年の間に存在していたと思われる。ちょうどこの時期の遺構に池が二カ所発見され、その内の一つから多量の木簡と木製品・陶磁器が出土した。出土遺物の年代から一八世紀中頃に埋没し、木簡は馬場関係者のものと思われる。

8 木簡の釈文・内容

豊臣I期遺構出土

溝二

(1) ・「＜中白斗入□」

・「＜新右衛門尉」

127×29×3 033

土壇八一

(2) ・「＜ い□□＜

甚三郎

(屋号) (穿孔)

不百四十端入

布

・「＜ い□□＜

(穿孔)

不伊勢大神宮

甚三郎

167×48×10 032

土壇一〇三

(3) ・「＜□□□」

・「＜甚三衛門」

140×25×3 033

土壇一四五

(4) ・「＜ 上□□□の□ノ」

合五□□入 弥七

・「＜ おさかノ

二郎左衛門尉殿 参

174×31×7 032

(5) ・「＜ いせ□□

(屋号)

上木棉百廿たん入

与九郎

・「＜ 太 五□□

与九

195×41×10 032

(6) ・「＜ ※ 新田棉ゑり

百五十入

・「＜ ※ □□□□ 江戸 村弥兵衛

180×45×12 032

- (20) ・「 \vee さかい」
 ・「 \vee □□□」
 (55)×14×4 039
- (21) ・「 \vee 錢六貫文」
 ・「 \vee 与八郎」
 93×26×4 032
- (22) 「天正拾六年四月吉日」
 237×53×2 065
- 豊臣Ⅰ期包含層
- (23) ・「□□□□□」
 「貫目船岡源□衛門尉」
 「□□□□□」
 (105)×44×6 019
- (24) ・「×吉日」
 「拾三貫目□□□」
 ・「×吉日」
 「拾三貫目□□□」
 (121)×41×9 019
- (25) ・「 \vee +」
 ・「 \vee 」
 111×32×6 032
- (26) 「 \vee +□□□」
 153×33×4 032

(27) ・「 \vee 卅たん



(186)×31×4 019

豊臣期の木簡と墨書のある木製品は現在五五点出土している。内訳は荷札・付札類が三九点、曲物や桶の蓋か底板が三点、桶側が四点、鞘二点、糸巻一点、組合わせ材四点、木片五点である。その他将棋の駒(角二点、銀一点、歩二点)や漆器碗等の底面に漆書したものも多いが、これらは集計していない。珍しいものに「池之坊」と漆書した碗がある。今回報告の二七点のうち二四点は荷札・付札類で、(17)(19)(22)は加工された木片である。

荷札・付札には屋号・品名・数量・人名が書かれている。人名は基本的には差出人である、その理由は、(5)「いせ」の「与九郎」や(6)「江戸」の「□村弥兵衛」など大坂以外の居住地を明示したものであること、(4)のように「の□ノ弥七」から「おさかノ二郎左衛門尉殿参」のように受取人には敬称を付すことから推察できる。なおこの三点とも屋敷地の一画にある同一のゴミ穴(土壙一四五)から出土しており、屋敷地の住人は「二郎左衛門尉」であったと思われる。また(2)「伊勢大神宮 甚三郎」は、当初伊勢大神宮に関係する甚三郎と考えたが、(7)「伊勢大神宮 住吉大明神」と併記された荷札が出土したことから、送荷の安全祈願をしたものと考えている。両者

とも水運の安全を守護する神である。

荷札類の中には年月日を書いたものがあるが数は少く、一般的には書かなかったようである。(18)は年貢の麻二三貫に付けた札である。「文四十二月吉日」の「文四」は「文禄四年」の略記と思われる。

(10)は短冊形で上端を圭頭にしたものである。上部に穿孔があり、屋号もなく他の荷札類と異なる形態をしている。(22)は三日月形に加工した薄い細長い木片で、中央に元号・年月日を書いている。荷札を再加工したものではなく、用途は不明である。

品名は(1)中白(ちゅうじろ)、(5)木棉、(6)棉、(7)えんせう(煙硝)、(8)漆、(9)くしこ(串海鼠)、(14)白米、(16)波つづら、(18)麻、(21)銭があり、中白は二割ぐらい減るまで搗いた精白米或は砂糖のことで、くしこは串ざしの干しナマコである。木簡の形態は長方形の材の一端に左右から切り込みを入れた〇三二・〇三三型式が多く、荷にくくりつけるための紐かけを持つ。(21)銭の木簡はこれらと異なり、長方形材の上端を凸形に削り出している。銭だけは梱包の仕方、札の付け方が異なっていたようである。

(12)は屋号を示すらしい二重丸の記号の下に「大さか衆」とあるだけで、品名・数量がない。裏面には何も書かれていない。上端左右に切り込みがあるので荷札には違いなろう。「大さか衆」が差出人か受取人か不明であるが、個人名を書かない特異な例である。

江戸時代中期池1

(28) 〇□□□条入□□
〔百カ〕
八□

(29) 〇□□□条入
〔(154)×26×4 019〕

(29) 〇□□□条入
〔(穿孔) 御中間之内 大□友江村 友□
〔江カ〕 小左衛門様 門四郎□
〔内カ〕 大坂御城□ニ而 177×32×3 011

(30) 〇□□□付カ
〔穿孔) 大坂御城内山□武□門内
〔本カ〕 吉
より
大 内
吉
〔よりカ〕
〔215)×47×25 019

(31) 〇□□□大坂御城内
〔穿孔) 大坂御城内
吉
〔よりカ〕
〔107)×(13)×3 081

(32)	「山里丸」 [] []	193×54×3	011
(33)	(穿孔) 「北」 [] []	319×64×8	011
(34)	(穿孔) 「大嶋林」 []	138×37×5	011
(35)	「奈んばんみそ」	78×78×9	061
(36)	「十全大補湯」 四拾匁入 代式「文」 [] []	85×82×5	061
(37)	「本カ」 [] 「方」 八味地黄丸 百目入	131×128×7	061
(38)	「 \oplus 」 「 \ominus 」 ・「(丸に違い鷹羽紋)」	79×61×9	061
(39)	「志の」	205×92×30	061

江戸時代の木簡及び墨書のある木製品は二三点出土している。内訳は木簡が一四点、曲物蓋六点、鑑札一点、下駄一点、糸巻への転用材一点、木片一点である。先述のように、すべて江戸時代中期の

池1の出土品である。出土地点が城外の馬場のある場所であることから、大坂城関係の名称が多出する。

(28)は豊臣期にもみられる荷札の形態であるが、(29)(30)(34)は長方形材の上端に孔がある。この地点では木簡一三点のうち有孔七点、無孔二点、不明四点と有孔の形態が多い。

(29)は友江村の門四郎より、中間の小左衛門にあてた荷札である。

小左衛門の肩にやや小さく「友」 \square とあり、中間身分であることから姓あるいは出身地を小さく書いたものと思われる、裏面の「大坂御城」 \square 「ニ而」は発見された場所が城外であることから、どのように解釈すべきかわからない。(30)は大坂城内の山本武左衛門あるいは武右衛門の小者である \square 吉より送られてきたものである。(31)は上部と左右が割れているが、片面に「大坂御城内」とあり、大坂城関係者の木簡である。(32)は字が二重に書かれていて判読し難いが、上部に「山里丸」とある。大坂城北側の曲輪である。(34)は人名らしきものが書かれているだけで、裏面には何も書かれていない。

(35)(36)は曲物の蓋に書かれたもので、(35)は「南蛮味噌」、(36)は薬である。味噌や薬の容器の蓋にはしばしば内容を示す墨書があったことが知られる。(38)は鑑札と思われる、矩形で上端に孔がある。丸に違い鷹羽の家紋があることから、いずれかの家中を示すものだろうか。紋の絵は稚拙である。(39)は下駄の側面に墨書したもので、所有者名と思われる。

なお釈文について内田九州男氏を始め、渡辺武・中村博司・安竹貴彦・菅良樹氏に御教示いただいた。

9 関係文献

大阪府教育委員会『大坂城跡発掘調査概要Ⅰ』（一九八九年）

（佐久間貴士）

木簡研究 第六号

巻頭言——記紀批判と木簡——

一九八三年出土の木簡

直木孝次郎

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 平

城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏舎屋下層遺構 藤原宮跡 長

岡宮・京跡 平安京右京八条二坊 定山遺跡 水走遺跡 津堂遺

跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 万町北遺跡 山垣遺跡 福成寺

遺跡 沢田宮谷遺跡 長尾沖田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡

宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大堂遺跡

篠脇遺跡 北稻付遺跡 鯉沼東Ⅱ遺跡 下野国府跡 多賀城跡

一乗谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作国府跡

草戸千軒遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡

一九七七年以前出土の木簡（六）

平城宮跡（第三次）

平安時代の日記にみえる木簡

日本古代の人口について

兼田 山田 英雄

兼田 元一

『木簡研究』一～五号総目次

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

大阪・東郷遺跡

1 所在地 大阪府八尾市光町一丁目

2 調査期間 一九八八年（昭63）七月～八月

3 発掘機関 勉八尾市文化財調査研究会

4 調査担当者 西村公助

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代中期～鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

東郷遺跡は、河内平野の中央部に位置し、長瀬川と玉串川とに挟まれた沖積地上に立地している。今回の調査は、ビル建設にともな



（大阪東南部）

い、勉八尾市文化財調査研究会が東郷遺跡第二八次調査として実施した。調査の結果、古墳時代前期の溝一条、平安時代後期の井戸一基・土壇一基・小穴四個を検出した。

墨書は、平安時代後期の井戸の側板に転用された曲